

コンケン大学での居候生活 (23)

伊藤信孝

コンケン大学客員教授・工学部

本報では、筆者のコンケン大学におけるTOR (Terms of Reference)の仕事の役割の一つである、学術活動について記す。記憶が定かでは無いが、数年前から(あるいはもっと以前からかも知れない)が、Linked-in, ResearchGate に登録してから、定期的に自身の論文がどの程度参照され、どのくらいの人が、世界的に興味を持ち、アクセスしているかを知ることができるようになった。また年代的にも、それらの論文がいつ頃のものなのか、などを知ることができるようになった。また次なる目標として、どれほどの論文が読まれれば、どの程度までの注目度をクリアできるなど、励ましにもなる。過去に発表した論文だけでは、いつまで待っても読者は増えない。継続して絶えずコンスタントに論文を発表しておかなければ読者は増えない。これは言うまでも無く著者自身が継続的に、時代の変遷に追随して「論文を書く」という姿勢を維持して居なければ実現はしない。その意味で定期的に自分自身に配信される上記2つの学術情報は興味深い。インパクト・ファクタで論文の質的なものについても情報を得ることが出来るし、現状の能力(実力)ではどのレベルの研究機関、大学などに就職できるかなどと言った情報までも付加してくれる。

以下に示すのはその例の一部であるが、あらためて自らの足跡を見つめ直すことにもなると同時に、その意義(論文として残す、あるいは論文を書くこと)についても新しく気付かされる。なる程、このような利点や効果があったのかと言う具合にである。以下の論文は、大半が定年退職前の現役時のものであり、参照してくれている読者の国籍や年代などを垣間見ると、途上国有り、若者有りで、上記したように「なる程このような形で役に立っているのか」と目覚めさせてくれる。論文を発表し、関係学術誌に掲載すると言う事は、生活の糧となる給料を貰い、また研究費の支援、助成をして貰っている以上、報告の意味を含め当然の義務であり、さらには人類、社会への貢献である、と自分にいい聞かせ、また職務を怠らないための自戒としてきたが、その姿勢に間違いは無かった。しかしこの考えは、少々おかしいと言うことを指摘しておく。なぜなら本来研究は人類社会への貢献が最優先課題であるべきであるからである。世界中の若い世代が興味を持ち、読んでくれると言うことは、知識、技術の移転であり、加えて次世代人材育成でもある。またこのことが人類、社会への大きな貢献である。現役時代は業績を上げる事が自らの地位の昇進、昇級につながるから、否が応でもしなければ成らないと言う義務感も働く。しかし定年を迎え、そうした拘束条件が無くなると、気楽になれる。なぜならそうした事を意識しなくても良いからであり、純粹に社会や人類への貢献につながる仕事ができるからである(と筆者は考えて居るが、どうもそうでない人も沢

山いるようである。むしろそうした人の方が体勢を占めているかのようである、退職後も安定した収入を得て、好きなことを続けられるよう、関連機関に移籍し、身の回りをしっかりと固め、やおら本来の目標に向けて行動開始かと思いきや、そのような状況を作り、老後の生活の安定確保をすることが最終目標であるかの如き振る舞いを余りにも目にする昨今である)。圧倒的多数の人からの支援を受けても、次なる選挙が近づくと保身が優先し、また他党に配慮し、国家の進むべき正しい方向への決断ができないなど、多数派政党に属する多くの議員はいったい何をしているのかと言う批判を良く聞く。コロナ禍で密を避けるために営業時間短縮を要請している一方で、自らが決めた規定に反して飲食を伴う会合に出かける理不尽な挙動がまかり通っている。一方で規制しても他方で桶の栓を抜いている。状況が悪くなると国民にしわ寄せを押しつける、と言うのが巷の意見のようである。悪しき例を見せず模範となる緊張感を持って事に当たると言う姿勢だけは堅持したい。国籍、世代を問わず、彼ら読者の多くが筆者の関わる論文に興味や関心を持ってきていることは、はなはだ嬉しい限りであり、更なる大きな励みとなる。

ResearchGate June 7, 2021 (配信)

The following research papers were recently cited and requested to upload. Ito was very much happy to know that many young people are reading the past work of Ito.

The application of turntable mechanism to agricultural machinery

Article Jan 1988

Development of the rice combine harvester equipped with the hulling function

Article Jan 1984

Bulldozer blade control

Article Dec 1991

Asian Agriculture Growth Strategy

Article Mar 2019

Financial viabilities of husk-fueled steam engines as an energy-saving technology in Thai rice mills

Article Sep 2005

Practical method of reducing turning motion resistance of tracked vehicles

Article Dec 1987

Intelligent method of sinkage prediction for tracked vehicles using possibility theory and fuzzy neural network

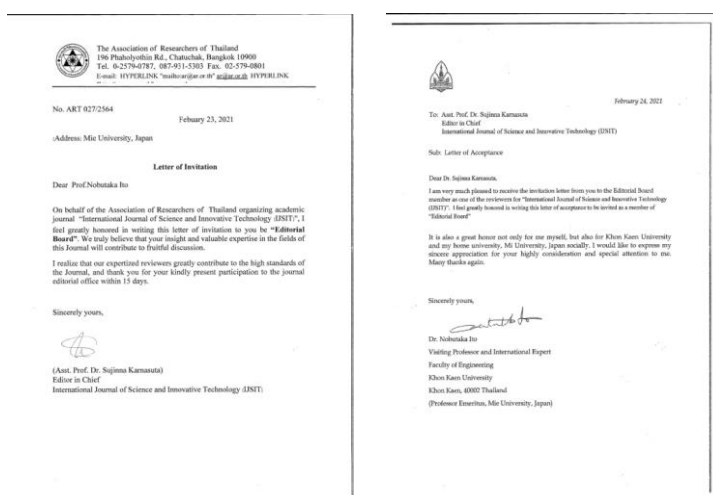
Article Jun 2007

The development of the turntable combine harvester for improving turnability and operation efficiency

Article Dec 1990

上に掲げた論文の多くは現役時代のものであり、懐かしさも手伝い、また記憶も鮮明に蘇ってくる。でも何時までも昔の良き思い出に浸ってばかりは居られない。定年退職後は、自分は何を、またどれだけのことをしたかと言う回顧も必要である。2021年6月10日現在の筆者の状況は以下の通りである。かつての古き良き時代からの長年の関係で、個人的「情」や「忖度」も働いているかと考えるが、最終決定は機関や組織の「長」の個人的判断だけではできない点を十二分に考慮しても、現在の状況は身に余る光栄でもある。特に政府機関の組織からの評価、要請により、さらなる関わりを持つことができている現状は極めて有り難いことである。以下は筆者に関わる最近の状況を示す。

- Visiting Professor, International Expert, Research and International Relations Affairs, Faculty of Engineering, Khon Kaen University (October 5, 2020 ~ now)
- Editorial Board member of “International Journal of Science and Innovative Technology (IJSIT)”, The Association of Researchers of Thailand organizing academic journal (February 2021 ~)



- Editorial Board member of AGRI MECH monthly Journal (2016 ~ up to date)
- Visiting Professor, Department of Industrial Engineering, Faculty of Engineering, Chiang Mai University (October 2019 ~September 2020)
- Visiting Professor, Department of Mechanical Engineering (October 2007 ~ September 2018), Faculty of Engineering, Chiang Mai University
- President of IFPaT, NPO, Japan (April 2007 - June, 2018)
- Advisory in Research Administration Center, CMU (2013 up to September 2018)
- Honorary Citizen of Hochiminh city, Vietnam (December 2016)
- AGRI - MECH Journal, Editorial Committee member (July 2016 ~)
- Advisory Committee member, Maejo University (February 2019~)
- Research Fellow, Faculty of Engineering Mie University (April 2006 - March 2008)

- Visiting Professor, International Exchange Affairs, Mie University (April 2006 - March 2007)
- Honorary Doctor awarded by CMU (January 2007)
- Professor of Emeritus, Mie University, Japan (2006)

また、以下は遠い昔から現在に至るまでの国際交流に関わる事項である。

- 1) Fifty days friendship and good will tour to USA awarded as the member of the group by NBN (Nagoya Broadcasting Network Co. Ltd in 1964. He stayed for three weeks mainly at University of Utah and joined a series of seminar prepared by University of Utah. After that for thirty days he joined the tour by two station wagons provided by University of Utah and looked around the USA for one month) (このツアーの参加が、その後の国際交流への関心に火を付けた。企画支援機関にあらためて謝意を表したい。)
- 2) The Certificate of Appreciation awarded by JICST (Japan Information Center for Science and Technology, private organization) He was awarded for almost 10 years contribution in academic paper translation from Russian to summary in Japanese language. November 1991 (この機関は現在 J S T という機関になっている。)
- 3) Academic research award entitled "Study on the Slip-draft-control of tractor" was awarded by Japanese Society of Agricultural Machinery in April 1981 (Academic award)
- 4) The certificate of Appreciation awarded by JICA Director on August 4, 1997 for his long contribution to JICA (Japan International Cooperation Agency)
- 5) Acoustic Tomography for Three-Dimensional Temperature and CO₂ - Concentration Measurements in Environmental Fields was awarded by Japanese Society of Visualization, July 15, 1998 (Academic research award)
- 6) The Certificate of Appreciation awarded by Leyte State University, Philippines, September, 2001
- 7) The Certificate of Appreciation awarded by Kasesart University, June 2002
- 8) The Certificate of Appreciation awarded by Bogor Agricultural University, Indonesia, August 2001
- 9) Awarded as Professor Emeritus by Mie University, May 2006
- 10) Certificate of Appreciation by Society of Automobile Engineers, Japan, May 2006
- 11) Long term contribution for JSAM (Achievement Award) awarded by JSAM, Japanese Society of Agricultural Machinery, March 2007
- 12) Awarded for Honorary Doctoral degree by Chiang Mai University, Thailand, January 22, 2009
- 13) Awarded for Special Presidential Award by Mie University, June 12, 2009

- 14) Awarded for Honorary Membership by Japanese Society of Mechanical Engineering, 2010
- 14) Awarded for Honorary Membership by Japanese Society of Agricultural Machinery, September 27, 2011
- 15) Awarded for "Fellow" by CIGR (Commission Internationale du Genie Rural), Japan, September 21, 2011
- 16) Awarded Special Presidential Award by Mie University, October, 2013
- 17) Hochiminh City Honorary Citizenship Awarded by Nong Lam University and Vietnamese Government, December 2015
- 18) Best Presentation Award & Best Manuscript Award by TSAE, Thai Society of Agricultural Engineering, entitled Examining How Agricultural Mechanization was Won in Japan, September 8 - 10, 2016
- 19) Certificate of Appreciation was given by The 4th AFSA International Conference on "Food Safety and Food Security", entitled on "Future Farmer of Asia Growing Program", August 11, 2018, at Angkor Paradise Hotel, Siem Reap, Cambodia

古き良き時代は「本当に良かった」しかし今はどうか、と常に自分を見つめる姿勢が必要と自戒している。世界的情勢の変化、グローバル化、高度情報化時代がもたらした多くの恩恵を享受し、このような時代に生きることが出来た事に感謝して居る。

本年 2021 年 5 月には 2 つの国際学会があり、いずれもコンケン大学が企画、ホストを勤めたイベントであり、機を逃さず論文発表した。日本の大学からも基調講演者としての要請を快諾頂いた 2 人の先生には、オンラインではあるがその任を果たして頂いた。この場を借りて謝意を表す。さらに、予期せぬ事にイベント終了後しばらくして筆者に参加証明書と参加登録費受領書が届けられたが、さらにもう 1 枚証書が入っているのを見つけた。驚いて取り出してみると筆者が発表した論文に対する **Good Presentation Award** (優良論文発表賞) であった。2 人の日本人基調講演者を紹介した事への謝意という感じも強いが、とにかくその配慮に素直に謝意を表すことにした。上記の様に、如何にホスト大学と言えど企画代表責任者の一存ではそうした決定は、容易にはできないと判断するからである。この 2 つのイベントから 2 週間後に **SIGNAL 2021** なる国際学会がスペインのヴァレンシアで開催された、これについてはすでに前報で記したが、とにかく大きな国際学会が立て続けに 3 つも続き、緊張はしたが久しぶりの活気を得る機会にも成った。コロナ禍で鬱陶氣的にも落ち込む毎日の生活に、少しばかりの光明をもたらしてくれたと言う感じである。「この年にしてまだ出てくるの」と、嫌われているところがあるのも承知している。その状況の下でも、敢えてその機会を得ることが出来る事を素直に喜び、感謝している。4 月の中旬にはコンケン大学工学部の学生・院生に特別講演をする機会を頂いた。その後の 3 つの国際学会参加である。実質 2 つの学会での論文発表ではあるが、強烈なインパクトを感じたのは V D O (予めビデオ録画した

講演発表資料) がもつ強大な発信力である。従来のような直接学会参加の場合と異なり、他の参加者は時間を掛けて論文を読む必要が無く、その論文が何を問題として位置づけ、研究の目的を何処に置き、どの様な方法で解決しようとしているか、またその結果がどうだったのかを短時間で読み取ることができることである。さらに発表者の講演時の表情から、その研究に賭ける本気度、真剣さ、責任感を肌で感じることができることである。上記した SIGNAL 2021 では、専門が異なるという理由もあるが、筆者の努力不足で参加者を募れなかった事に責任を感じ、一度は謝罪し、お詫びに参考資料として送付した過去の学会での発表時のV D Oが引き金となって基調講演の機会を頂くことになった。おそらくペーパー・ベースの論文ではこのような早い対応は得られなかったと思われる。受け取った側が、早い決断をするには、話している内容が十分に伝わっている必要がある。論文の内容を理解するには話している言語が円滑に理解されている必要があることが第一条件である。幸運も加担し結果的に思わぬ貴重な機会を得た(頂いた)と感謝して居る。この事は筆者自身のみならず、後に続く世代にも幅広い活動の場と機会を創るからである。このことも筆者のような一職を終えた者の果たすべき重要な役割の一つと捉えている。この経験に刺激され、また重要性への認識から更なる資料の作成を考えている。本来、この種の講義は教員と学生が直接顔と顔をあわせて教員側から教授するという方式であったものをビデオ録画しておけば、もっと高い効果を得られたのではと惜しむ気持ちも多い。本格的なユー・チューバーへ (youtuber) の挑戦ではないが、方向としてはその必要性を意識している。

以下は図1 TSAE 2021 (タイ農業工学会 2021年 年次大会参加証明書、図2 同学会年次大会での優秀講演発表賞(賞状)を示す。



図1 TSAE 2021 年次大会参加証明書



図2 優秀講演発表賞